ソポクレス悲劇における＜時＞と人間

川島　重成

はじめに

キリスト教と文化研究所創立50周年を迎えて「人文学の未来」（Humanities: The Next Fifty Years）を総主題とする連続講演会の第一回目にお招きいただき、たいへん光栄に存じます。私が「＜時＞と人間」というタイトルを掲げましたのは、与えられた総主題の中の「未来」が心にひっかかったからです。察するにこの総主題の背景には、例えば「アベノミクス」なるものが異様な脚光を浴びて囃したてられている現在の日本の世相の中で、「人文学」の未来はどうあるべきか、はたして未来はあるのかといった問題意識があったのか、より身近なこととしては、近年の国際基督教大学（ICU）のリベラル・アーツ改革でかつての「人文科学科」という組織が解体したことへの危機感があったのではないでしょうか。この「人文学の未来」という総主題が示唆していると思われる深刻な諸問題に対して、私が直接何らかの応答ができるわけではありませんが、この総主題について思いめぐらしているうちに考えついたこと、ソポクレスの悲劇の中で、人間が＜時＞とどう向かいあい、＜時＞をどう生きているかについて、ご一緒に検討してみたい、そして最後にソポクレス悲劇との比較において、新約聖書、特にロマ書の一節を取りあげて、そこで同じ問題がどのように考えられているかを一瞥したいと思ったのです。それは当キリスト教と文化研究所の創立理念とも無関係ではなかろうと、愚考したからであります。

1．波多野精一の時間論に触れて

この総主題にある「未来」、これは英語ではfutureです。future（ラテン語futurum）は、日本語で「未来」とも「将来」とも訳せます。「未来」は「来たらんとするものが未だ来たらず」というニュアンスが感じられ、他方「将来」は「将に来たらんとする」という謂であって、波多野精一（『時と永遠』岩波書店、1949年）は「将来」こそがこのfuture（futurum）の根源的な意義であり、「未来」はその派生的現象である、と断じています（4頁。ドイツ語のZukunftをも参照）。つまり波多野は、私たちが生きる最も基本的根源的な＜時＞は、将来より現在を経て過去へと向かい、「生ずるはいつも滅ぶるであり、来るはつねに去るのである」（8頁）とし、この自然的生の難関を克服せんとして、「自由の天地に飽くまでも自己主張を続けようとする所に文化的生の本質は存する」（21頁）、さらに「活動する主体は自由の世界を求めつつ来るべき現実を将来に望み見る」（52頁）と言っています。このようなオプティミズムを謳歌するかのごとき文化的生においては、＜時＞が過去／現在から未来へと進み、自然的生からの一種の逆転が生じています。しかし「文化的生は自然的生を、又は歴史的時間は自然的時間を基体としてその上に立つものであり、［……］結局は絶えず壊滅の中に消え失せて行く自己の姿を蔽い隠そうとするはかなき幻の衣に過ぎぬであろう」（56-57頁）と波多野は喝破するのです。（波多野はこのあとさらに「宗教的時間」を展開します。）

確かに私たちが例えば歴史を考える場合、すなわち波多野のいう文化的生の立場に立つとき、＜時＞は過去から未来へと流れると思い描いています。私たちがfutureを「将来」ではなく「未来」と受けとるとき、来るべき＜時＞を未だ来たらぬ＜時＞、それゆえ私たちがこちらから働きかけうる＜時＞として、それに主体的に対処し、滅びゆく生になんとか活路を見出そうとしている、と言えるのではないでしょうか。

2. ギリシア人の基本的時間感覚

本講演は、波多野のいう文化的生を典型的に生きたと考えられるギリシア人に即して、「＜時＞と人間」という問題を特にソポクレスの悲劇の中に探ることを目的としていますが、その前に彼らギリシア人が基本的にどのような時間感覚を持っていたかを一瞥しておきましょう。

日本人がfutureをあるときは「未来」と言い、あるときは「将来」と表現する、これが日本語固有のものであるように、ギリシア語にもたいへん興味深い特色ある＜時＞表現があるのです。すなわちそのギリシア語に刻み込まれた時間表象から判断する限り、古代ギリシア人は過去を自分たちの面前にあるもの、そして将来（未来）を自分たちの背後にあるものとして言い表したのです。ノックスはこれを ‘Backing into the Future’ と表現しました（B. Knox, *Backing into the Future: The Classical Tradition and its Renewal*, New York, London: W.W. Norton, 1994, pp.11-12）。このことは次の二例からも見てとれるでしょう。

まず『オデュッセイア』11巻482-483行ですが、生きながら冥界に降ったオデュッセウスは、そこで影のごときアキレウスの亡霊に出会って驚き、次のような慰めの言葉をかけます。

> おぬしの方は、アキレウスよ、これまでもおぬしより仕合わせな者はいなかったし、今後ともそれは渝（かわ）るまい。
>
> （ホメロス『オデュッセイア』松平千秋訳、岩波文庫、1994年）

ここで「これまで」と訳されている語、つまり過去を指す語は、文字通りには「前に」を表す＜プロパロイテ＞（προπάροιθε）であり、「今後とも」つまり未来（将来）は、「うしろに」を意味する＜オピソー＞（ὀπίσω）で言い表されています。この両語を「これまで」「今後とも」と訳している松平訳は、時間的な「前」「後」と受け取ると、そのままで私たちにもごく自然に感じられるでしょうが、この「前に」は基本的には空

間的な意味で「（眼の）前に」、つまり「面前に」ということであり、「今後とも」もやはり空間的な「うしろに」、つまり「背後に」として意識されていたようであります。

もう一例をあげれば、ソポクレスの『オイディプス王』485行以下で、コロスが予言者テイレシアスからオイディプス王こそ先王ライオス殺人犯だと聞かされて、不安に戦（おのの）きつつ歌う＜第一スタシモン＞の一節です。

現在（いま）も将来（さき）もさだかにみえねば、
かきくらむ心の闇にうれいおののく。
ポリュボスが子なるわが君が
ラブダコス家の敵（あだ）となり
互（かたみ）にせめぎしことありと
いまもむかしもわれ聞かず。
（ソポクレス『オイディプス王』藤沢令夫訳、岩波文庫、1967年）

ここで「将来（さき）」と訳されている語がやはり＜オピソー＞（ὀπίσω）、文字通りには「うしろ」です。そして「むかし」と訳されているのが＜パロイテン＞（πάροιθεν）で、これは先に『オデュッセイア』11巻485行で＜プロパロイテ＞（προπάροιθε）とあった語と基本的に同じ語で、「前」を本義としています。いずれも古代ギリシア人が過去を面前にあると感じ、将来（未来）を背後にあると意識したことを示しています。

ところでこの箇所でもう一つ注意しておきたい語があります。「かきくらむ心の闇」と大胆に意訳されている（ソポクレス『オイディプス王』（『世界古典文学全集（8）』）高津春繁訳、筑摩書房、1964年、では「予感」となっている）＜エルピス＞（ἐλπίσιν）です。これは古典ギリシア語で、ときに肯定的に「希望」あるいは「期待」という意味に用いられる反面、この例のように「（不安な）予感」さらには「危惧」といった否定的なニュアンスを帯びることもあります。これはいわばうしろ向きに歩むしか

ない、それゆえ人の目にはっきりと捉えられない将来（未来）に対して一義的ではありえない人間の心のありようをよく表しているギリシア語だと言えるでしょう。しかしソポクレスより500年以上も後に成立した新約聖書においては、この同じ＜エルピス＞がもっぱら肯定的に「希望」あるいは「望み」の意味に用いられるようになります。この消息については、本講演の最後にもう一度、より詳しく考えてみたいと思います。以上を踏まえて、次にソポクレスの悲劇『オイディプス王』（前429-426年頃）と彼の遺作『コロノスのオイディプス』（前406年、ただし前401年上演）の中から、＜時＞に言及されている代表的な箇所を取りあげて、その＜時＞を登場人物たち、特にオイディプスがどのように生きたか、すなわち本講演のタイトルに掲げた「＜時＞と人間」の関わりについて検討してみることにしましょう。

3.『オイディプス王』における＜時＞と人間

3-1.『オイディプス王』1213-1215行について

周知のとおり、この悲劇はオイディプスが自己の真実を発見する過程とその結果に彼がどう向かいあっていったかを描いた名作です。かつて赤子の彼をキタイロンの山中に棄てるように命じられた羊飼いの男から、ついに自分の恐ろしい素性を知るに至ったオイディプスは、「ああ、思いきや！　すべて紛うかたなく、果たされた。おお光よ、おんみを目にするのも、もはやこれまで――生まれるべからざる人から生まれ、まじわるべからざる人とまじわり、殺すべからざる人を殺したと知れた、ひとりの男が！」（1182-1185、藤沢令夫訳）という言葉を発して王宮内に走り去ります。それを受けて、コロスは「いたましや　オイディプス王、／おんみを見ては、／汝（な）が運命（さだめ）をみては、人の子を／ゆめ幸ありとわれは思わじ」（1193-1195）と歌ったあと、次のような注目すべき発言をしています（1213-1215、藤沢令夫訳）。

ἐφεῦρέ σ᾽ ἄκονθ᾽ ὁ πάνθ᾽ ὁρῶν χρόνος·
δικάζει τὸν ἄγαμον γάμον πάλαι
τεκνοῦντα καὶ τεκνούμενον.

全能の「時」の裁きは、君図(はか)らざるに
生まれし子がまた生む父たりし
いまわしき　縁(えにし)をあばきぬ。

この3行の藤沢訳は意訳に過ぎるので、より原文に近い岡道男訳（ソポクレース『オイディプース王』（『ギリシア悲劇全集』第3巻）岡道男訳、岩波書店、1990年）を引用すると、次のようになっています。

望まぬあなたを見出した、すべてを見る「時」が
生む者と生まれる者をかねてより等しくする、
結婚ならぬ結婚を裁く。

これに簡単な注釈をつけると、第1行目（1213）の藤沢訳「全能の「時」」は問題です。原文には「全能」の語はなく、岡訳の「すべてを見る「時」」がより原文に忠実です。私はさらに直訳的に「すべてを見ている＜時＞」と訳します。＜時＞（クロノス）にかかる＜ホローン＞（ὁρῶν）なる語は、「見る」という動詞の現在分詞です。これを「見る」ではなく、「見ている」と訳すのは、単にギリシア語の意味ないし文法の問題では尽きず、オイディプスの無知（盲目性）とその発見のドラマとしての本悲劇の本質に関わってきわめて重要です。オイディプスは何も見ていなかったのに、＜時＞はずっと見ていた、今も見ているという対照性がここに浮彫りにされているからです。

藤沢訳と岡訳を比較してもう一つ問題にすべきは、原文の第2行目（1214）冒頭のδικάζει＜ディカゼイ＞という動詞を主語である＜時＞

（ὁ χρόνος＜クロノス＞）の行為として、どのように解するかです。藤沢訳はこれを「「時」の裁きは」と意訳しています。岡訳はこれを「裁く」と直訳しています。しかしこの「「時」が［……］裁く」という現在形は、＜時＞の一般的行為を言っているのでしょうか。岡は岩波『ギリシア悲劇全集』版のこの箇所の脚注に次のように記しています。「擬人化される「時」は、人間の生に伴ってこれを支配する力として、すなわち事実を明かす者、記録し保存する者、裁く者としてあらわれる。ここではオイディプスの罪を明らかにして裁き、無秩序（「結婚ならぬ結婚」）に秩序をもたらす」と。すなわち＜時＞が擬人化されてほとんど運命のごとく、人の罪を裁く者として表象されることを、岡は正しく指摘しています。しかしそうだとしても、ここではそれがオイディプスへの裁きとして具体化されているわけです。したがって、岡は原文をそのまま「裁く」と現在形で訳してはいるものの、事実上はこれをこのドラマの直前にオイディプスの身の上に生起した出来事（「［……］あなたを見出した［……］「時」が」）、つまり＜時＞がオイディプスを「裁いた」と捉えている筈です（藤沢訳も、「［……］「時」の裁きは［……］縁（えにし）をあばきぬ」と意訳して、この「裁き」がすでに起こったことと解しています）。

これについて私はもう一つの解釈の可能性を提示したいのです。これは原文の第2行目（1214）の行末のπάλαι（＜パライ＞）という副詞をどこにかけて解するかの問題とつながりますが、岡訳はこれを「かねてより」と訳して（藤沢訳では訳出されていません）、「等しくする」という原文にない語を補なってそれにかけています。つまり「生む者と生まれる者をかねてより等しくする、／結婚ならぬ結婚（を裁く）」と訳しています。オイディプスの結婚は「かねてより」（πάλαι）久しくおぞましい状態で続いてきたのだと解しているのです。しかし私はこのπάλαι（＜パライ＞）を、ある研究者の指摘に従い（J. C. Kamerbeek, *The Plays of Sophocles, Part 4: The Oedipus Tyrannus*, Leiden: Brill, 1967, ad 1214-15）、δικάζει（＜ディカゼイ＞「裁く」）という主動詞にかけることも可能であり、その方が原文

の真意に適うと考えます。私はこのようにして問題の「裁く」という動詞の現在形を、事実上英語文法における現在完了進行形に等しいと解するのです（ギリシア語には、現在完了進行形はなく、過去から現在に至る行為の継続性を表すには、動詞の現在形と「時」の継続を示す副詞を組み合わせるのです。まさにこの場合のように）。すなわち、私はこの3行を次のように解します。それを比較的忠実な岡道男訳を修正して示してみましょう。

望まぬあなたを見出した、すべてを見ている「時」が、
生む者と生まれる者が等しい
結婚ならぬ結婚を（「時」は）かねてより裁いてきたのだ。

このように訳すのが、『オイディプス王』の筋（ミュートス）から見てよりふさわしいと考えるのです。このドラマはオイディプスの罪の裁きが主題ではありません（このドラマで生起する出来事の、つまり筋（ミュートス）の中心は、オイディプスの「探究」と「発見」です）。この劇中においてオイディプスが罪を犯し、その罰を受けるというのではない、むしろ彼がこのドラマ以前に犯した罪、知らずしてその中に生きてきた穢れが暴かれるのです。＜時＞がそれを暴くのです。「裁き」ということを言うのなら、＜時＞はオイディプスを「かねてより」、つまり彼が「結婚ならぬ結婚」という無秩序に陥って以来（このドラマ以前からこのドラマの現在に至る十数年の間）、裁きつづけてきたと解せましょう。「すべてを見ている「時」」の句は、そのことを暗示しています。ここでも「見ている」は「見つづけてきた」を含意します。ただオイディプス自身がそのことに気づいていなかったのです。その恐ろしい真実に彼はこのドラマの中で今、気づかされた。この彼の「発見」を、いわば＜時＞の側からの行為として言い換えたのが、「［……］あなたを見出した、すべてを見ている「時」が」の句だと解せるのではないでしょうか。それゆえこれをあえて論理的に言い直せば、次の

ようになりましょう。「＜時＞は今はじめてあなたを見出したわけではない。むしろすべてを明るみに出したのだ。見出したのはあなただ」と。

3-2. 人間ドラマ＝神的ドラマ

この悲劇のこれまでの筋（プロット）の展開をつぶさに見ますと、オイディプスは自己の素姓をただ偶然に知ったわけではなく、悪疫に苦しむテバイを救うべくライオス殺害犯探索に乗り出し、その中から浮上してきた「自分は何者か」の問いを追求した、その結果の自己発見でした。それにもかかわらず、ソポクレスはコロスに「＜時＞がオイディプスを見出した」と歌わせている。つまり詩人はオイディプスの自己発見がそのまま＜時＞による「発見」でもあると語っていることになります。ここに人間ドラマであるのみならず、神的ドラマでもあるギリシア悲劇の真骨頂があるのではないでしょうか。この「発見」はオイディプスの行為がもたらしたものと見るだけでも、私たちは十分に納得することができましょう。しかしギリシア悲劇詩人はその同じ出来事を同時に人間を超えるものの視点からも描くのです。オイディプスは自己の真実を知ったのですが、それはまさに人間としての限界に突き当たったということでした。彼は自己の無知を知ったのです。さらに言えば、そのことでオイディプスは＜時＞がすべてを見ていること、この悲劇の全体構成を踏まえて換言すれば、アポロンがすべてを知っていたこと、真理はアポロンのものであることを知らしめられたのです。

このことを先に紹介した、ギリシア語に刻印されている古代ギリシア人の時間感覚に照らせば、どういうことになるのでしょうか。オイディプスは自分の「過去」の輝かしい業績を踏まえて、具体的に言えば、かつてスフィンクスの謎を解いてテバイの人々を救ったという知の英雄としての誇りをもって、彼の「現在」を「未来」に向かって自信にみちて歩んでいたのです。彼はその＜時＞を、彼の「現在」と「未来」をあたかも自分の前にあるかのごとくに、自分の意志と構想力によってプログラム化し、自分

のものとして支配できるかのように楽観視していたと言えましょう。しかしそれは錯覚だったのです。オイディプスは彼の背後から迫る暗闇の世界に向かって、実際はうしろ向きに突き進んでいたのです。＜時＞は「将来」として彼の背後から、不意に襲いかかってきたのです。このように詩人は＜時＞を人間オイディプスが支配し切れるものではないこと、彼を超えるものであることを示しました。

3-3. ＜時＞＝運命

この＜時＞はほとんど運命というに等しいと考えてよいでしょう。運命はこのドラマにおいても、一方ではオイディプスが自分の意志と構想力をもって生きるものとして表されますが、他方では、ついには彼を超えるもの、彼に背後から、外側から（あるいは彼の内奥の未知の世界から）襲いかかってくるものとして描かれます。実はこの悲劇においては、運命のこの二つの表象が、＜テュケー＞と＜ダイモーン＞という語によって見事に差異化されているのです（これについては、拙著『アポロンの光と闇のもとに――ギリシア悲劇『オイディプス王』解釈』三陸書房、2004年、特に190-192、215-217、226-231頁参照）。＜テュケー＞とは「偶然」というニュアンスを色濃くにじませる運命です。運命はその全容を見通すことのできない人間には「偶然」と思えます。自己の真実について何も知らないオイディプスは、かつてスフィンクスの謎を解いた知の英雄として、自信満々、このドラマで二度目の謎解きに挑戦します。彼は運命（テュケー）にあまりにも楽観的でした。彼はその自己の運命への信頼を表白するクライマックスにおいて、自分を恵み深き＜テュケー＞の女神の子と宣言するに至ります（1076-1085、藤沢令夫訳）。

> どんな不幸でも、起らば起れ。この身の素姓が、いかに賤（いや）しくあろうとも、それを知ろうと心に決めた、わしの気持は変りはせぬ。あの女は、女にしてはなかなかの気位、きっとわしが下賤（げせん）の生まれであるこ

とを、恥じているのであろう。さあれ、恵みぶかきテュケー（運命の女神）の子をもってみずから任じるこのわしは、けっして何ものによっても、辱しめられることはないだろう。げにテュケーこそは、わが母、そしてめぐる月日は、同じ母もつわが兄弟。わしはその歳月の歩みにつれて、卑小になることもあったし、偉大になることもあった。かかる生まれを誇るわしが、どうしてみずからの血筋を裏切り、この世におけるわが素姓を、つきとめるのをおそれようか。

ここでオイディプスは、＜テュケー＞を女神と捉えてわが母と呼び、月日つまり＜時＞をも擬人化して自分の兄弟と称しています。このように＜時＞と＜テュケー＞を彼の同族と見なして絶大な信頼を寄せています。しかしその信頼とははかない自己信頼に他ならなかったのです。オイディプスはここでいみじくも「その歳月の歩みにつれて、卑小になることもあったし、偉大になることもあった」と言っています。しかし彼の強烈な自己信頼はもはや、その「卑小になることもあった」過去に学ぼうとはしない。彼はひたすら現在の、そして未来の偉大な（実はそう見えているにすぎない）自己像を思い描いていたのです。彼は自分自身について、彼の＜時＞についてそれほどに楽観的であり、驚くほど盲目だったのです。

その＜時＞が彼の期待を覆してかの真実を暴露しました。オイディプスはその自己像とはまったく違う恐ろしい自分の素姓を発見させられたのです。すでに述べたように、それは＜時＞が彼の背後から襲いかかってきたということでした。ここでは詳述を控えますが、その同じ事態を、＜テュケー＞が＜ダイモーン＞＝神の力としてその正体を現した、と解することができるのです（拙著『アポロンの光と闇のもとに』215-217頁参照）。彼が生きてきた＜時＞、自分が信頼を寄せてきた＜運命（テュケー）＞の正体を暴かれ、自分は何も正しく見ていなかったと知らされたオイディプスは自分の眼を突きます。このようにして図らずもアポロンの予言者テイレシアスのように盲目となったオイディプスは、彼に襲いかかってきた＜ダイモーン＞

を、ついにアポロンと同一視するに至るのです（1327-1331、藤沢令夫訳）。

コロス　ああ何という　恐ろしいことをなされたか。
何とてかくもむごたらしく
お眼の光を消されたか。いずれの神が
あなたを唆（そそのか）したもうたのか？
オイディプス　こうなったのはアポロンのため、親しき友らよ。
それはアポロン――
だが両の眼を突き刺したのは
ほかならぬみじめなわし自身。

このコロスの問いにある「いずれの神が［……］」の「神」には、原文では＜ダイモーン＞の語が当てられています。このコロスの問いにオイディプスは「それはアポロン」と応えたのです。しかしそれに加えて彼は「両の眼を突き刺したのは　ほかならぬみじめなわし自身」と言っています。ここに外から襲いかかってきた＜ダイモーン＞＝アポロンと対峙して立ち上がる新しいオイディプスが誕生したことが示唆されているのです（詳しくは、拙著『アポロンの光と闇のもとに』226-231頁参照）。

4.『コロノスのオイディプス』における＜時＞と人間

4-1.　＜時＞とともに生きる老オイディプス

悲劇『オイディプス王』には、オイディプスの最期は描かれません。オイディプスはしかしながら、ソポクレスの遺作『コロノスのオイディプス』に再び、娘アンティゴネに手を引かれた盲目の老人として登場します（1-8）。

目の見えぬおいぼれ男の娘、アンティゴネーよ、
わたしたちが辿り着いたのは、どこの国、どんな連中の町だろうか。

今日という日、このさすらいの身のオイディプースを
誰かが、ささやかな施し物でもてなしてくれるだろうか。
わたしがもとめるのはわずかなもの、だが手に入るのは、わずかどころか
もっと乏しい、――それでもわたしには充分なのだが――
なぜならわたしには、ひとつには度重なる苦労が、また長い伴侶の歳月が、それにさらに加えて
持って生れた貴い天性が、辛抱ということを教えてくれる。
（ソポクレース『コローノスのオイディプース』（『ギリシア悲劇全集』第3巻）引地正俊訳、岩波書店、1990年、以下同）

ここに「度重なる苦労」と並んで、「長い伴侶の歳月」とあります。＜時＞がオイディプスを「見出した」、つまりオイディプスに彼の真実を知らしめた、そのとき以来の彼の歩みは、その＜時＞を伴侶とし、自己の＜運命（ダイモーン）＞を自覚的に生きる新しい生であったことを、この一句は示しています。上の引用で「辛抱」と訳されているギリシア語（στέργειν＜ステルゲイン＞）は、「運命の甘受」という含意を持つ語です。＜時＞がオイディプスに彼の無知を突きつけた、そのことで彼のこれまでの生にある意味で死をもたらしたとすれば、その後の彼の生とは、苦難の中で運命を引き受け、死を瞬間瞬間に生きる生であったと言ってよいでしょう。しかし彼は単に苦難に打ちひしがれただけの老人ではありません。オイディプスは自分にこの新しい生を学ばせたものとして、苦難と伴侶としての＜時＞に加えて、さらに彼の「貴い天性」（τὸ γενναῖον＜ゲンナイオン＞）をあげています。彼の生来の高貴さが、かつての無知ではなく、無知の知、さらに言えばアポロンの知に根拠を据えて新しい輝きを放っていたと解せるでしょう。

オイディプスはとある禁制の神域に知らずして足を踏み入れ、この土地（コロノス）の男に見咎められますが、それが「万事を見通す女神た

ち」たるエウメニデス（恵みの女神たち）の杜であることを教えられ、彼の終（つい）の住処となるべき地に辿りついたことを知ります。このエウメニデスに、『オイディプス王』1213行において＜時＞に冠せられていたと同じあの形容詞（「すべてを見ている」）が付されています。エウメニデスとはオリュンポスの神々以前の太古から人間界のみならず世界万象を「見通す」権威ある女神たちであり、復讐の女神たち（エリニュエス）とも呼ばれ、＜時＞や＜ダイモーン＞もそうであるように、根源的な秩序の一つの表象であったと言えましょう。オイディプスが知らずしてこの女神の禁制の杜に足を踏み入れたとは、苦難を甘受し、＜時＞とともに歩んできた者として、彼が今や特別にそこに入ることを許容される存在となったことを、視覚的に表現しようとしたものと解せないでしょうか。実はこの盲目のオイディプスは、間もなく「おれの言葉は、みんな目が見える」（74）と、このエウメニデスに冠せられた形容詞（「万事を見通す」）と同根の動詞によって、自己の語る言葉の持つ権能を言い表すに至ります。ここではこれ以上詳述することは控えざるをえませんが（拙著『ギリシア悲劇の人間理解』新地書房、1983年、第九章「『コロノスのオイディプス』におけるダイモーンの顕現」参照）、このドラマは、外的には穢れはてた老オイディプスが「神聖な者」（287）たる内実を宿すに至っていることを、次第に明らかにしていきます。具体的には彼の外側のありように躓くことなく、彼を迎え入れ（葬っ）てくれる者には、その宿りが祝福となり、彼を追い払い、迫害し、あるいは自分に都合よく利用しようとする者には禍となるという、本来はエウメニデスの、そして＜ダイモーン＞の職能とされる力を、この老いた肉体がすでに保持している消息が、プロットの進展とともに露にされていきます。そしてその極みにオイディプスがこの地コロノス（詩人ソポクレス誕生の地）でその生涯を閉じ、文字通りアテナイの守護の＜ダイモーン＞と化すに至る、それまでのプロセスを描いていくのです。

4-2. オイディプスとテセウス

老オイディプスは、その流浪の果てについにアテナイ郊外コロノスの地で、彼の生涯の終りを託すことのできる高貴な人物アテナイ王テセウスに出会うのですが、そのとき彼に、次のように＜時＞の法則を解き明かします（607-620）。

親愛なるアイゲウスの子よ、老いや死が
訪れることのないのは、ただ神々だけだ。
ほかのものはすべて、万物を征服する時が滅ぼす。
大地の力も朽ち果て、肉体の力も朽ち果てる。
信義は死に絶え、不実が芽生え、
親しい友の間にも、国と国との間にも、
同じ心が変わらずつづくことはない。
遅かれ早かれ、
楽しさも辛（つら）さとなり、それから、ふたたび愛（いと）しさへと変る。
たとえ今は、テーバイとあなたの間が、
日々うららかに、仲睦まじくつづいていても、
限りない時の流れは、数限りない昼夜を生み出し、
そのうちには、些細なことから、現在の友好の固いきずなも
槍の穂先に崩れ去ってしまうこともあろう。

このように「万物を征服する時」の支配下にある人間世界のありようを語り聴かせることができたのは、まさに＜時＞と歩みをともにしてきた者の権威に基づいてのことでした。同時に彼が生きてきた万物流転の真理を受けとめるにふさわしい相手をテセウスに見出しえたからでした。テセウスはオイディプスを歓迎して次のように言うことのできる人物だったのです（560-568）。

話してもらいたい。たとえ、あなたが言い出す用向きが、どんなに
恐ろしいものであろうと、わたしが尻込みするようなことはあるまい。
このわたしとて、自分でも、あなたのように、よそ者として育てられ、
ほかの誰よりも、異郷で危険にさらされて、
命がけで闘った覚えがある。
だから誰であろうと、今のあなたのような、他国から来た人には
救済の手をさしのべずに、避けたりなどしないつもりだ。
何しろ、わたしは、自分とて人の身で、明日の日には、わが身の定めも、
あなた以上に恵まれているわけでもないことは、よく承知している。

この言葉にオイディプスは彼自身と同質の生を生きている人物を確認できたのです。オイディプスはテセウスの深い生の洞察に裏づけられた歓迎の言葉に、次のように応えます（569-570）。

テーセウスよ、あなたの立派な心根が、今の短い言葉に
あふれ出ているおかげで、わたしは手短かに話すだけで済む。

この「立派な心根」には、本悲劇の冒頭で彼オイディプスが自分自身について述べた「貴い天性」と同じ言葉（τὸ γενναῖον＜ゲンナイオン＞）が用いられています。ここにこそ、アテナイの王とその日の喜捨を乞う老いた旅の者がともに信頼しあう盤石の礎があったのです。この信頼に基づいてオイディプスは、来たるべきアテナイとテバイの争いを、さらに彼の亡骸がアテナイの救いとなることを厳かに予言します（621-623参照）。

4-3. オイディプスの最期

次に一瞥したいのは、オイディプスがいよいよ神秘的な最期を迎えるこのドラマの美しい終局部分です。突如雷鳴が轟きます（1456）。オイディプスはテセウスに、「アイゲウスの子よ、わたしはこの国にとって、／歳月に

よって害(そこな)われることなく秘蔵されるべきものをお教えしよう」（1518-1519）と言って、アテナイの祝福の基となる彼の墓の在所はテセウス一人だけが認め、代々の長男にのみ伝授するべきことを教示し、さらに次のように説き明かします（1534-1538）。

［……］たとえ正しい暮しをしていたところで、
外からさまざまな国が、すぐに、あなどって荒らしに来るものだ。
なぜなら、人が神を敬うことをないがしろにして、狂気に走るとき、
神々は必ず罰を下すが、それには時間がかかるからだ。
アイゲウスの子よ、あなたにはそんな目に遭わないでもらいたい。

最後の行にある「そんな目」とは、数行前の「［……］荒らしに来る」からも察せられるように、人間の、とりわけ政治的世界における常であるヒュブリス（傲慢）を意味しています。これはオイディプスを通して、老ソポクレスがアテナイに切々と語りかけた「ヒュブリス」への誡めであり、遺言であったと言えるでしょう。ラインハルトは次のように述べています。英雄が死後半身として祀られる「英雄崇拝は（ここで）その原始的、魔術的意味からより崇高な精神的倫理的な意味へと高められる。［……］オイディプスの墓とその神秘の力はアテナイを幾千の国々の陥る荒廃、そのヒュブリスから守るであろう」（K. Reinhardt, *Sophokles*, Frankfurt a. M.: Vittorio Klostermann, 1948[3], S.229）。

いよいよオイディプスは娘たち（アンティゴネとイスメネ）の手を振り切って一人で歩み出します。彼は今まさに死を迎え、肉体を投げ捨てて文字通り＜ダイモーン＞となろうとしていたのです。冥府に向うオイディプスの道の安らかならんことを祈るコロスの歌のあと、知らせの男が登場してオイディプスの神秘に包まれた最期を伝えます（エクソドス、1579以下）。その中で、次のように大音声が響き渡ったと告げられます（1627-1628）。

そこにいるオイディプース、オイディプースよ、なぜ、行くのを
ためらうのか。そなたは、ずいぶん手間取っているぞ。

ここで引用した引地訳では曖昧にされていますが、「なぜ、行くのをためらうのか」の主動詞は一人称複数形であり、主語が「われら」であることは明白です。すなわちここで神がオイディプスに「われら」と呼びかけたのであり、その意味は深いのです。オイディプスは神々の世界に＜ダイモーン＞として迎えられることを、これは示しているからです。

この使者の報告全体に漲っている神秘と静謐には、名状すべからざるものがありますが、ここでは彼の感動的な結びの言葉をそのまま引用することで、その一端を垣間見るにとどめたいと思います（1656-1665）。

しかし、あの方がどのような運命で亡くなったかは
ただテーセウスのほかに、人の身で誰一人、言える者はないのです。
あのとき、あの方を亡きものにしたのは
神の、火を走らせる雷電（いかずち）ではなく、また
海から巻き起こった嵐でもなく、
あるいは神々から送られた案内の者か、あるいは死者たちの住まう
大地の光なき底の国が、歓び迎えて開いたものか。
それというのも、あの方は、嘆きもなく、病苦もなしに、
それどころか、人のうちでも、この上なく驚くべき
去り方をしたのです。

詩人がこの遺作を書いていたとき（前406年）、対スパルタのペロポネソス戦時下のアテナイは、まさに敗戦前夜にあったのです。軍資金は底を突き、パルテノン神殿の名高いアテナ女神像の黄金は剥がされ、有能な指導者は見当たらず、市民たちは飢えていました。戦争がアテナイの敗北で終ることをソポクレスも予感していた筈です。そして事実2年後の前404

年にアテナイはスパルタの軍門に降ったのです。この事実に照らしてみるとき、オイディプスの予言が真に指示していたものは明らかでしょう。オイディプスとテセウスの美しい信頼関係が象徴するアテナイのあるべき姿とは、オイディプスが疲れはてた肉体の死を超えて不滅の存在と化すように、戦争の帰趨や政治的権力や富の離合集散とは別の世界において成立するものです。このオイディプス像こそ、まさに「歳月によって害（そこな）われることなく秘蔵されるべきもの」（1519）、すなわち人類の人文学的理想としてのアテナイを具現し、その象徴となっていると言って決して過言ではないでしょう。

5. エピローグ

5-1. 21世紀におけるギリシア的理想

人文学の本来の道は、いわばこのオイディプスの生涯が象徴するものを私たちが自分の経験として反復することによって獲ちとり、維持していくべきものと言えるのではないでしょうか。しかしこのギリシア的理想はソポクレスが生きたポリス共同体ならぬ、科学・技術と経済合理主義がもっぱら力を振るうグローバル化した21世紀の現代において、はたしてどこまでリアルなものでありうるのでしょうか。ギリシア的なるもの、あるいはより広くヒューマニズムの道は、はたして未来の希望を謳歌することができるのでしょうか。現代は、アテナイ市民がこぞってギリシア悲劇を観賞し、そこでオイディプスをはじめとする巨大な英雄たちの生と死を自分たちの経験と重ね、大いなる精神的高揚（カタルシス）を覚えて、日常生活に生かしていった、その基盤としての共同体が失われて久しい時代です。オイディプスが辿った軌跡を私たちの経験として生きることはとてつもなく困難な時代ではないでしょうか。ここですでに短く言及した、古典ギリシア語のἐλπίς（＜エルピス＞）が端的に「希望」を表さず、不安や危惧をも含意する語であったことが想起されます。ギリシアの道は近代ヒューマニズムとは違って安易に未来の希望を約束するものではなかった

のです。暗澹たる現実にあって理想を掲げ、希望を語るには、いわば、英雄オイディプスの巨大なエネルギーを必要とするのではないでしょうか。

5-2. パウロ（ロマ書）における希望
――キリスト教と文化研究所の理念に寄せて――

オイディプスの生涯に象徴される古典ギリシア文化がその指導的役割を終えた紀元後一世紀、同じ地中海世界の片隅に、ヘブライズム・ユダヤ教の伝道を引きつぎつつ、ヨーロッパ文化のもう一つの源泉となる精神が立ち現れてきました。言うまでもなく、このキリスト教と文化研究所設立の基盤である、文化と緊張をもって対峙し、文化を基礎づけ生かすキリスト教精神に他なりません。その基本テキストである新約聖書は、あたかもギリシア精神を継承するかのように――それを修正し、その足らざるところを補いつつ、それを生かそうとするかのように――ギリシア語で書かれたという事実に、改めて注意を喚起したいと思います。ここではその新約聖書からただ一箇所、ギリシア文化の内側からは決して語りえなかった人類の、いや万物の希望を謳いあげたロマ書8章18-25節に一言触れることで、この講演の締めくくりとしたいと思います。

> わたしは思う。今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない。被造物は、実に、切なる思いで神の子たちの出現を待ち望んでいる。なぜなら、被造物が虚無に服したのは、自分の意志によるのではなく、服従させたかたによるのであり、かつ、被造物自身にも、滅びのなわめから解放されて、神の子たちの栄光の自由に入る望みが残されているからである。実に、被造物全体が、今に至るまで、共にうめき共に生みの苦しみを続けていることを、わたしたちは知っている。それだけではなく、御霊の最初の実を持っているわたしたち自身も、心の内でうめきながら、子たる身分を授けられること、すなわち、からだのあがなわれること

を待ち望んでいる。わたしたちは、この望みによって救われているのである。しかし、目に見える望みは望みではない。なぜなら、現に見ている事を、どうして、なお望む人があろうか。もしわたしたちが見ないことを望むなら、わたしたちは忍耐して、それを待ち望むのである。（口語訳聖書）

ここには全被造物がうめき苦しみつつ、滅びへの隷属からの自由を切に待ち望んでいるとの黙示的ヴィジョンが記されています。パウロは「被造物が虚無に服したのは、自分の意志によるのではなく、服従させたかたによる」（20節）と語っています。「被造物全体が、今にいたるまで、共に生みの苦しみを続けている」（22節）のは、人間の罪がその原因であり、パウロもそう認識しているに違いないのですが、パウロはなぜかここではそうは語らず、それは服従させた神の意志であった（20節）と述べています。人間は自分の力で己が罪とその結果から、自分もその一部である被造物を解放することはできません。そのことは今日のエコロジー的危機の深刻さからもますます明白になりつつあると申せましょう。人間には人間を超える道はないのです。だからパウロは被造物の苦しみは人間の罪によるとあえて明言せず、神の意志によると言ったのではないでしょうか。そこに万物の救いの希望が語られる根拠があるからです。

このパウロの神――万物を虚無に服せしめる神――は、人間そして全被造物の視点から見る限り、ほとんど運命と代わりがないように見えます。オイディプスを、彼の意志とは関わりなく、理不尽にも外側から操ったあの運命、あの＜時＞と代わらないように見えます。オイディプスの場合も、かの運命あるいは＜時＞がそれ自体で彼の救いとはなりませんでした。オイディプスがその＜時＞とともに歩むことによって、それを自ら獲ちとったのです。これは限りなく厳しい道ではないでしょうか。今日の私たちはそれに耐えうるでしょうか。にもかかわらず、人文学、すなわちヒューマニズムの道とは基本的にはこれ以外にはない、と私には思われます。

一方ロマ書8章は、万物を虚無に服せしめた、理不尽ともいえる、私たちを超える力が、同時に万物の救いの希望であると語っています。この神はまさにこの点でやはりオイディプスの運命、かの＜時＞ではない、それをも超える創造の神なのです。この創造の神だけが終りのときに万物が救われる希望の根拠であるとこの聖書の箇所は語っているのです（さらに言えば、パウロは全体として、特にロマ書5章1-11節他で、その希望がキリストにあってすでに現実となったと考えています）。このようにして、かのἐλπίς（＜エルピス＞）は、古典ギリシア語に孕まれていた多義性を脱却し、新約聖書のギリシア語において、明確な「希望」の意味を獲得するに至ったのです。パウロがロマ書4章17-18節で、アブラハムの故事を引いて次のように語っているとおりです。

> 彼はこの神、すなわち、死人を生かし、無から有を呼び出される神を信じたのである。彼は望み得ないのに、なおも望みつつ信じた。そのために、「あなたの子孫はこうなるであろう」と言われているとおり、多くの国民の父となったのである。

思うにもし私たちが厳密な意味で人文学の未来への希望を語りうるとすれば、パウロの「望み得ないのに、なおも望」むという希望の消息に耳を傾け、それを私たちの営みに内在化し、その上であのギリシアの理想を生かす道しかないのではないでしょうか。

私は波多野精一の『時と永遠』に短く言及することからこの講演を始めましたが、彼のいう「自然的時間」「文化的時間」につづく、「宗教的時間」にはあえて触れることはしませんでした。しかし波多野宗教哲学におけるこの第3の時間は、私が最後に短く示唆した希望の生と相即し、共鳴している筈であります。そしてこれはまた、当「キリスト教と文化研究所」の創設の理念とも、ひいてはICUの理念とも密接に関わっていると考えます。

要旨

ソポクレスの悲劇『オイディプス王』（前429年頃）と『コロノスのオイディプス』（前406年、ただし前401年上演）において、オイディプスは＜時＞をどのように生きたか。

『オイディプス王』1213-1215行を、筆者はKamerbeekの注解に示唆されて、岡道男訳を修正して、次のように訳する。

望まぬあなたを見出した、すべてを見ている＜時＞が、
生む者と生まれる者が等しい
結婚ならぬ結婚を（＜時＞は）かねてより裁いてきたのだ。

これはオイディプスが自らの真実を知って走り去った直後、コロスがうたう歌の一節である。オイディプスがこのドラマ以前（の＜時＞）に犯し、知らずしてその中に生きてきた穢れを、＜時＞がここで暴露した。一方＜時＞はオイディプスを、「かねてより」、つまり彼が「結婚ならぬ結婚」という無秩序に陥って以来、「裁いてきた」と解せる。ただオイディプスはそのことに気付いていなかった。それをこのドラマの中で気付かされたのである。この「発見」を、いわば＜時＞の行為として言い換えたのが、「［……］あなたを見出した、すべてを見ている＜時＞が」である。

詩人はオイディプスの自己発見がそのまま＜時＞による発見でもあると見ている。ここに人間ドラマが同時に神的ドラマであるギリシア悲劇の真骨頂がある。

『コロノスのオイディプス』の冒頭、娘アンティゴネに手を引かれて登場する盲目の老オイディプスは、次のように言う。「わたしには、ひとつには度重なる苦労が、また長い伴侶の歳月が、それにさらに加えて／持って生れた貴い天性が、辛抱ということを教えてくれる」（引地正俊訳）。かつて＜時＞がオイディプスの真実を「見出した」。そのとき以来の彼の歩

みは、その＜時＞＝運命を伴侶とする新しい生であった。上の引用で「辛抱」と訳されているギリシア語（ステルゲイン）は「運命の甘受」を含意する。この老オイディプスは、その流浪の果てに、ついに彼の生涯の終りを託することのできる高貴な人物、アテナイ王テセウスに出会い、＜時＞と歩みをともにしてきた者の権威によって、「万物を征服する＜時＞」の法則を語り聞かせる（607-620）。そして彼の最期を知らせる雷鳴が轟くなか、人間の、とりわけ政治的世界の常である「ヒュブリス」（高慢）に陥らないようにとの誡めを語る。

このソポクレスの遺作悲劇が創作されていたとき、アテナイはペロポネソス戦争の末期、スパルタの軍門に下る敗戦前夜にあった。ソポクレスがオイディプスとテセウスの美しい信頼関係によって象徴させたアテナイのあるべき姿とは、戦争の帰趨や政治的権力や富の離合集散とは別の世界で成立する、まさに「歳月によって害（そこな）なわれることなく秘蔵されるべきもの」（1519）、すなわち人類の人文的理想としてのアテナイであった、と解せよう。

人文学の本来の道とは、いわばこのオイディプスの生涯が象徴するものを、私たちの経験として反復することによって獲ちとり、維持されていくべきものであろう。

オイディプスの生涯が象徴する古典ギリシア文化がその指導的役割を終えた紀元後一世紀、同じ地中海世界の片隅に、ヨーロッパ文化のもう一つの源泉となる精神が立ち現れた。本講演では新約聖書からただ一箇所ロマ書8章18-25節を取りあげる。そこで語られるパウロの神――万物を虚無に服せしめる神（20節）――は、人間、そして全被造物の視点から見る限り、オイディプスを理不尽にも外から操ったあの＜時＞＝運命と代らないように見える。オイディプスはその＜時＞とともに歩むことによって、ある意味で彼の運命を克服した。しかしこれは限りなく厳しい道ではなかろうか。一方ロマ書8章は、万物を虚無に服せしめた創造の神は、同時に万物の救いの希望であると語る（23-25節）。

思うに私たちが今日人文学の未来への希望を語りうるとすれば、パウロの「望みえないのに、なお望む」という、この希望の上に、あのギリシアの理想を生かす道しかないのではなかろうか。これはまた本研究所ICCの創設の理想とも密接に関わっている。